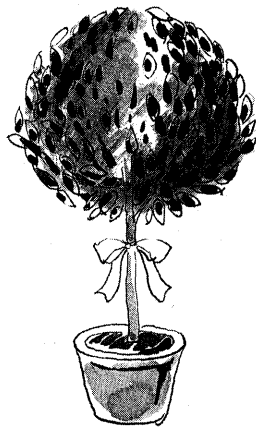


幼児期の総合的指導を求めて

Ⅰ 図式期の基底線・基底面の描き方

浜田 美智



Ⅰ. 研究の目的

幼児期の「描く」行為は、生活の中でごく自然に自発的なかたちで始められる。彼らは描くことから、表現による開放感と充実感を体験する。私たちはこの様にして描かれた幼児画を全面的に受け入れ、絵に現れている彼らの思考や、心の微妙な動きを読みとり、幼児期の行動

を理解するための手掛かりをつかみたいと考えている。

幼児は五、六歳頃になると、紙面の下部に一本の横線を引き（基底線）その線上に人物や家や動物を直立させ並べ描きする。この描き方は、事物を紙面に存在させるために、描く場所の必要性を空間的に自覚した証であろう。この様に幼児が画面に基底線を描くことは、前図式期から図式期への移行を示すサインとして既に認められ

ているが、今回は特に五歳児の絵を観察していると、さまざまな基底線の描き方に気付き興味をもった。同時にこの様な描き方は発達上、どのような意味を持っているのであろうか。

本研究は、特に図式期に出現する基底線や基底面の描き方に注目し、発達上の意味合いについて考察する。

Ⅱ 研究の方法

1. 調査内容及び方法について

(1) 個人別に自由画帳の絵を全て写しとる。

(2) 絵の特徴について、次の要因から考察する。

i 絵の発達の程度。

ii 描いている形象や線の伸びやかさ、筆圧の強弱の程度、紙面使用のバランスの程度。

iii 描いている枚数。

iv 二歳児からの絵との比較。

v 園での遊びの様子や友人関係と親子関係（特に母子関係）

2. 調査の対象と調査期間

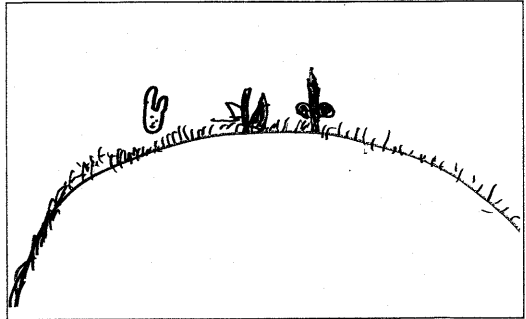
A園の五歳児（'85年4月～'86年3月生まれ）の25名（女児12名、男児13名）で、三年保育と四年保育を対象児とする。

調査の期間は、'91年4月から8月までの期間に自由画帳に描いた五三五枚の絵を対象とする。今回は特に五歳児の絵を対象にしているが、二歳から四歳頃に描いた描画も参考資料とする。

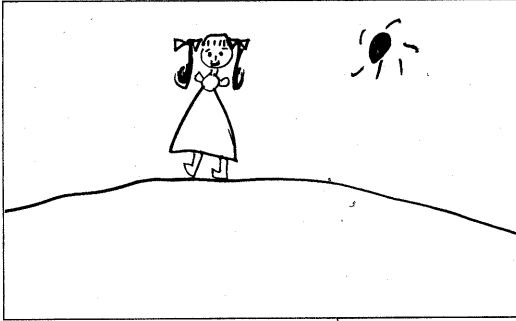
Ⅲ. 結果と考察

対象児25名は、全員図式期の絵であることが確認できた。

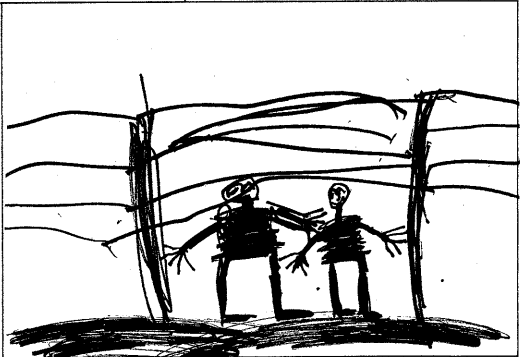
彼らの基底線や基底面の描き方については次のような特徴がみられた。



▼図2 R子 5.9



▲図1 E子 5.8



▼図4 J子 5.8



▲図3 E夫 5.7

1. 基底線の描き方

図1から図4の絵は、何れも基底線を描いている。図1のE子は、最近特に目立って絵本や童話に熱中する様になると、次第に行動面にも落ち着きが見られるようになる。紙面中央にくっきり半円形の基底線を描き、その線上に草花を丁寧になべ描きしている。

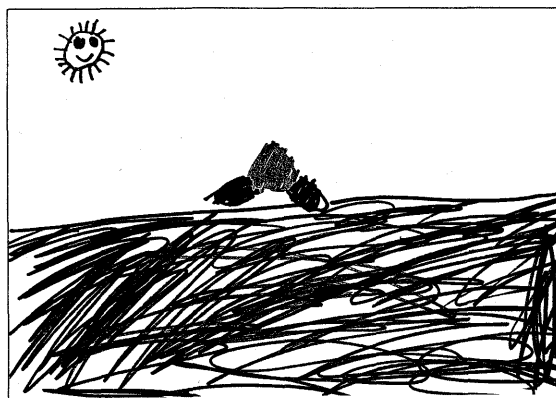
図2のR子は、仲良しグループに入り安定し自己を前面に出すようになった。R子の絵からは、本児の散歩している中央の伸びやかな線と、空に輝いている太陽に内面の幸せな感情を読みとることができる。

図3のE夫は、減多に絵を描かないが、じっくり取り組んで描いていることがわかる。基底線上の二人の男児は大地にしっかり立ち、頭部・首・胴体・二本の腕と五本の指・二本の脚は細部まで描き完成した正面人物像である。

図4は園での縄跳び遊びの再現で、線上にJ子の仲良しの友達がいって中央に太陽を描き、本児の安定した気持ちがそのまま画面に現れていて、E夫の絵と同様に完成し

た人物像である。以上のように4枚の絵には、上下の空間を規定する一定の軸の存在により空間関係を固定して描いていることがわかる。

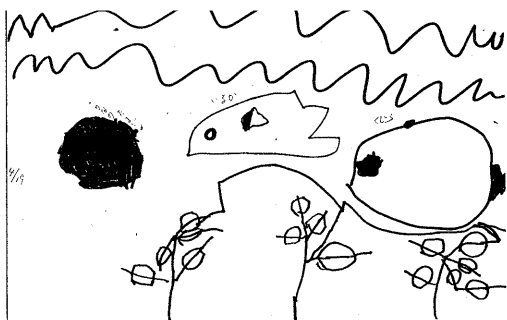
▼図5 O夫 5.7



▼図7 O子 6.4



▲図6 A夫 5.9



2. 基底面の存在

今回の調査の結果から、五歳児の絵には基底線と同様に、基底面の存在が確認された。

図5のO夫は、園内に生息している昆虫に興味を持ち、採集や飼育に熱中し始めると、行動面にもこれまでと違って自信が見えてきた。最近のO夫の絵には図5の様な力強い筆圧で大胆に描く絵が多い。この絵は紙面の半分を塗り潰し面として捉えている。左上の太陽や、中央の地平線上のトンネル型の三角形は、画面のバランスを保ち、本児の内面の安定感がそのまま現れているようである。

図6も同様に海中を面として捉えている。海中にはコンブが生え、魚の卵やイルカ、くじらが泳ぎ上部には波が立っている。本児は綾取りや折紙の名人で、A夫の几帳面さが絵によく現れている。

図7の「兎さんが水の上で寝ているの」は、O子を中心に二羽の兎が波乗りしている絵である。本児は入園当時から緊張感が強く、園になじみにくかったが、最近の

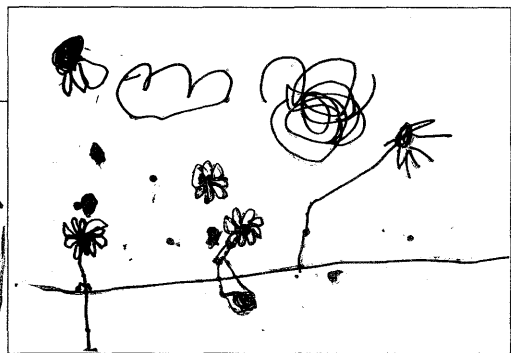
O子は見違える様に元気になった。二羽の兎は水の基底面に寝ていて波と平行に描いているが、O子の位置は兎と異なった面空間にいる。緊張感から開放されたO子は、自由な気持で描き易い独自の方法で描いていることがわかる。

このように、基底面は紙面全体や一部の面を意識しながら描いていること、また幼児が描こうとするテーマの内容を最も描き易い幼児独自の手段を用いていることがわかる。このような独自の描き方を発達面から見ることとする。

3. 幼児独自の視点による描き方

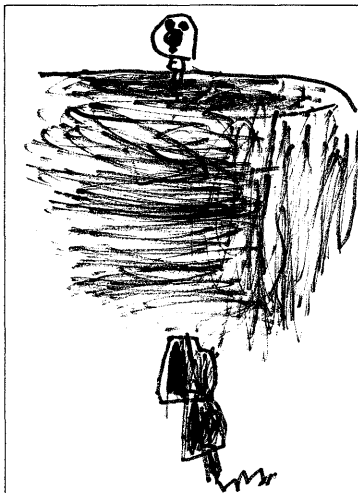
基底線や基底面の出現を発達の側面から考察するために、K夫・S子・m子の絵について一年前に描いた絵と比較する。

図8のK夫の二枚の絵を比較すると、前者は一本の基底線上に花を描き、その上に雲と太陽を描いていることから、K夫は上下の空間意識のもとに描いていることが



▲図8-1 K夫 5.3

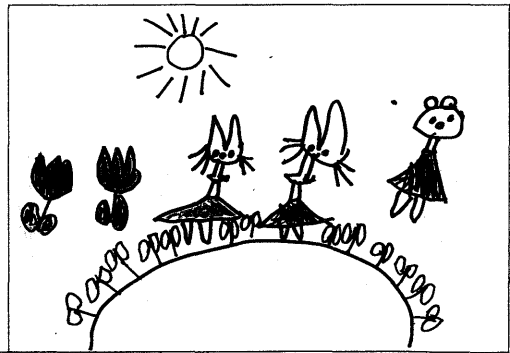
▼図8-2 K夫 6.4



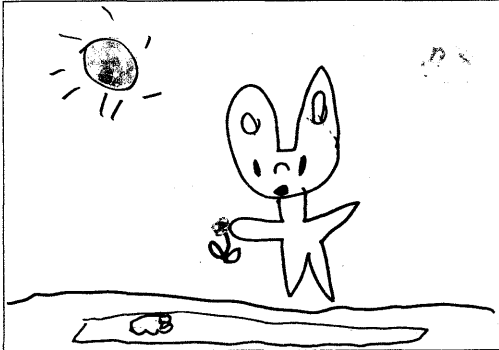
明らかである。約一年後の後者の絵は、陸地にK夫が立ち、海をゆく船は水平線（大人とは逆方向）を基準に視点を移動させて描いている。この描法は一般に展開描法と呼ばれ、幼児画の特徴の一つに数えられている。本児は親子関係もよく心身共に良好な状況にあり、本児の絵には子どもらしい伸びやかな絵が多く、自分らしさを素直に表現している。

図9のS_n子の二枚の絵を比較すると、前者は半円形の基底線の上に兎は立っているが、動物とチューリップは他の面に位置していて、基底線と基底面を同時に描いている。丁度一年後の絵は、兎が水に映った自分の姿を眺めている絵であり、この絵面には上下の空間と前後を規定する空間の二つの観面が存在している。描画の得意なS_n子は、アイディアのあるお話の絵が多い。この一枚も兎シリーズの絵話の一枚であり、本児の自由な発想と独自の表現がそのまま絵に現れている例である。

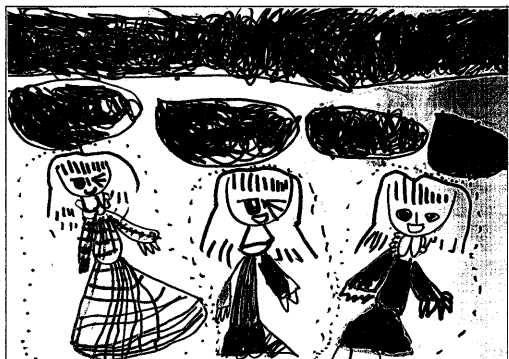
図10のm子の二枚の絵を比較すると、前者は、紙面の底辺を基底線に見立てその線上に三人の女兒を、上部に



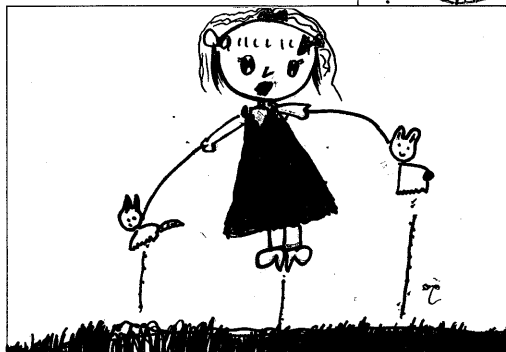
▼図9-2 S_n子 6.2



▲図9-1 S_n子 5.2



▲図10-1 m子 4.7



▼図10-2 m子 5.6

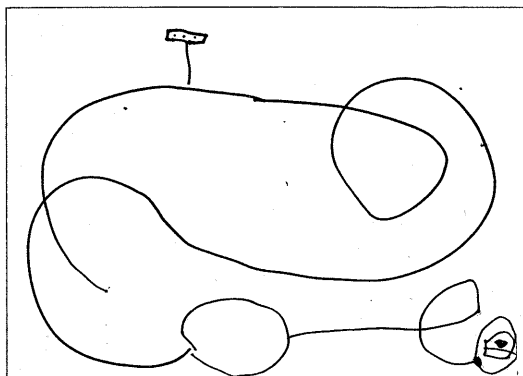
空と雲を描いている。後者の絵は、m子が二匹の犬を連れているが三者は一斉にジャンプした格好になっている。m子は最初に基底線である道を描き、その後、人物を頭部から描き始めたため、m子と二匹の犬は基底線から離れてしまった。そこで三者と基底線を垂直線で結ぶ工夫をしたのであろう。この描法はとても自然であり、ユーモラスである。m子は日常の生活に於いても友人が多く、特に運動能力が高く、遊びは活発でバラエティーに富んでいる。

以上の三例から、前者の単純な上下空間意識より始まり、年齢と共に空間に対する意識が複雑化していることがわかる。つまりK夫の絵からは視点の移動による描法を、S₁子の絵には上下と前後の二つの空間の観面を、更にm子の絵には自由な独自の描法で描かれている。又myやY子の二人の絵にも独特な描法が見られる。

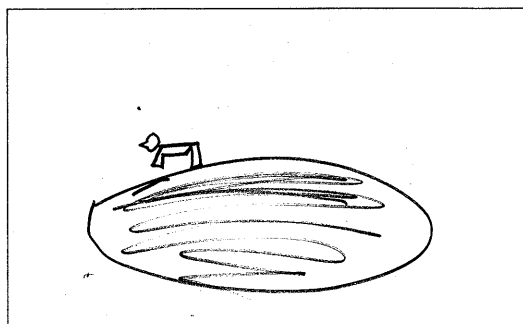
図11・図12のmyは、あまり目立たない存在であるが、知的で発想豊かな女兒である。図11は、父親と車で通る道路を一本の線で現している。本児の視点は紙面を自由

に移動しているが、常に基底線（紙面の底辺）に平行に描いている。

図12は、プールサイドを基底線として、横向きの人物形象をリアルに捉え、本児の身体は泳いでゆく方向性を示している。またプールは面として捉えていて、ここに於



▲図11 my 5.1.1



▲図12 my 6.1

いても観面混合の描法が見られる。

最後に図13のY子の絵に注目したい。本児が平均台を渡っている様子を、仲良しの友人宛に描いた手紙である。よく見るとY子は複雑な視点から描いていることがわかる。まず平均台を支えている二個の積木は、紙面の



▲図13 Y子 6.2

底辺の基底線に平行に置いているが、Y子の渡っている平均台とした一本の線は傾斜している。この傾斜した線は、左右と前後の空間を意識すると共に、本児の進行してゆく方向性を現し、力動性を感じさせる。Y子は右足を着地させ、太い両腕は全体のバランスを保つために遅しく、指先にまで力が漲っていて基底線に平行に描いた二本の腕も方向性を指していることがわかる。

以上、基底線や基底面は年齢と共に独自の描法により、複雑化してゆく過程を確認することができた。更にこの様な独自の描き方をする子ども達は、日常の遊びや生活の面に於いても、自ら自発的に生きいき行動している子ども達であることが確認された。

既に教育要領にも述べられている様に、幼児期は生活と遊離した特定の技能を身につけさせるのではなく、自分の気持や考えを、素材に素直に表現することを重視している。そして日常生活の中で子ども達が、自由に人や物と関わるにより、確かに成長してゆく姿を、本研究から確認することができた。

最後に、長期間にわたり、本研究の為に資料を提供して下さいました、高知市石立保育園の村田澄江園長や諸先生方、何時も楽しい絵を見せてくれました園児の皆さまに、心からお礼申し上げます。

(高知女子大学保育短期大学部)

参考文献

鬼丸吉弘著『児童画のロゴス——身体性と視覚——』勁草書房 一九九〇